

<目的>住教育は学校現場で扱いにくい領域として敬遠されているが、その理由の一つに教室内に取り入れにくいという特性がある。しかし、私たちの住環境は複雑になり、生活過程の中だけでは知識を習得しにくく、学校教育に期待がかけられている。現場の教師を援助し、教育成果を上げるには多量の適正な教材開発が欠かせない。この研究では、その第一歩として当領域の既存の教材シェアの大半を占める市販教材の実情を把握すると共に、その問題点を探ることを目的とする。

<方法>96年の中・高等学校の教材カタログを収集し、この情報をベースに住居領域の教材をピックアップした。その後、主要な4社の物件を中心に、教材の実情を種類・価格・使用分野・扱いやすさ等の視点から検討した。

<結果>1) 検討はK社・Y社・T社・K社を中心に行い、収集件数は151教材である
2) 教材の種類別では、計測機器が36.7%、住家具模型が21.3%を占め、次いで、ビデオソフト・標本・スライド・コンピュータソフト・掛図の順に多かった。3) 使用分野を学習指導要領等に基づいて分類すると、分野によって数・種類にかなり偏りがあった。4) 価格は、1万円～4万円の教材が約50%を占めるが、実際に扱う場合は、台数を揃える必要がある。5) グループやクラス単位で使用するものが多く、また、特別教室での使用が必要な教材が多い。6) 以上のような検討の結果、当領域の教材の種類や数の少なさ 系統制を欠いている等の問題のあることが明らかにされた。7) また、この領域の教材開発は、ここで対象としたように業者まかせの状態、教材使用当時者に足場を置いた主体的教材観等からは、程遠い存在であることが考察された。